

# 国立公文書館所蔵『越南亡国史』をめぐって

白石 昌也

はじめに

一 『越南亡国史』の刊行

本年度（二〇一八年）は日越外交関係樹立四五周年にあたっており、日本とベトナムの両国においてそれを記念するさまざまな事業が展開されている<sup>2</sup>。その一環として、日本の国立公文書館とベトナムの国家記録アーカイブズ局 (Cục Văn thư và Lưu trữ nhà nước Việt Nam) は、共同事業として、二〇一八年九月二〇日から、日越交流の歴史をオンラインで紹介するサイト「日本とベトナムくまぐまされた交流の軌跡をたどる」(Việt Nam-Nhật Bản: Lịch sử quan hệ hợp tác qua tài liệu Lưu trữ) を開設した<sup>3</sup>。八世紀の雅楽交流から始まり、一六〜一七世紀の朱印船貿易などを経て、近年の両国要人往来に至るまで、日越交流史を物語る資料が、日本側とベトナム側からそれぞれ二三点ずつ、合計四六六点紹介されており、たいへん価値あり、かつ見ごたえのあるウェブサイトを展示となっている。

その展示の第三章「近・現代の交流」の冒頭では、日本国立公文書館が所蔵する『越南亡国史』<sup>4</sup>が紹介されている<sup>5</sup>。本稿では、この『越南亡国史』について、まずその刊行経緯を記し、ついで国立公文書館の所蔵本を中心に、その体裁や内容などを概観し、また同書の持つ意義について述べたい。

国立公文書館の所蔵する『越南亡国史』は、その表紙で作者名について「越南亡命客巢南子述」と記している（詳しくは本稿第二章の冒頭五頁を参照）。

「巢南」(Gao Nam) は、ベトナムの革命家ファン・ボイ・チャウ (Phan Bội Châu、潘佩珠、一八六七〜一九四〇年) の号である。青年たちを日本に留学させる東遊運動 (Phong trào Đông Du) を組織した指導者として知られる。

ファン・ボイ・チャイは中部ベトナムのゲアン省ナムダン県で、貧しい儒者の息子として生まれた。その時代の多くの子弟と同様に、幼少のころから漢文の古典書籍を学び、一九〇〇年には阮王朝の主権するゲアン省での郷試に合格した。しかし、官界に出仕して栄達を目指す道を選ばず、フランス植民地支配を打倒して独立を目指す運動に身を投じた。

日露戦争が勃発すると、日本からの支援を得るために、ベトナムを脱出することを決意した。一九〇五年初め、彼は二人の同志とともに、ベトナム北部のハイフォンから密航ルートをとって、まず中国の防城へと脱出し、そこから香港、広州を経て、上海に至り、日本海海戦が終了した直後に、便船を得て日本に向かった。彼らは神戸港で下船し、神戸駅から東海道線の汽車に乗った。ただし、終点の品川駅には向かわず、その手前の横

浜駅で下車した。なぜかといえば、横浜の中華街に当時、中国の亡命政客・梁啓超が滞在していることを事前に知っていたからである<sup>6</sup>。

梁啓超（一八七三〜一九二九年）は中国の広東省新会県出身、一八八九年に清朝の主催する郷試に一七歳で合格。その後、変法自強運動の論客となるが、一八九八年戊戌の政変後に日本に亡命、横浜で雑誌『清議報』次いで『新民叢報』を編集、刊行していた<sup>7</sup>。

ファン・ボイ・チャウはすでにベトナムの国内で、梁啓超の冊子『戊戌政変記』、『中国魂』、そして雑誌『新民叢報』などを読んでいたら、回想録の中で述懐している<sup>8</sup>。ちなみに、『新民叢報』各号の冒頭目次の最後には奥付に該当する記載があり、その中で印刷者の住所として横浜山下町の番地が明記されていた<sup>9</sup>。このようにして、日本の土を初めて踏んだチャウたちは、まず横浜在住の梁啓超を頼ったのである。

その間の経緯について、ファン・ボイ・チャウの最初の回想録「獄中記」<sup>10</sup>は、次のように記す。——当時、横浜で『新民叢報』を主宰する梁啓超は、日本滞在が長く日本の事情に通じていると聞いていたので、まず彼に会って日本人を紹介してもらおうと考えた。梁とはまだ会ったことはなかったが、「落地一声哭即已相知、読書十年眼遂成通家、以此為相求之根柢」(この世に生まれて一声泣けば、すでに知り合いです。まして私は一〇年間先生の書物を読み続け、今では先生と心が通じ合っていると確信しています。先生に面会を求めるゆえんです)と記した書簡を送った。その結果、梁はチャウとの面談に応じた<sup>11</sup>。

ファン・ボイ・チャウの晩年の回想録「自判」は、次のように述懐している。——書をもって梁啓超先生に自己紹介した。その書状の中で、「落地一声哭、即已相知、読書十年眼、遂成通家」云々と記した。梁はこの書を読んで大いに感動し、私と面談した。挨拶の言葉は「同行の」曾公<sup>12</sup>が

通訳したが、心事の談(心の中に抱く考えについての話し合い)は、多く「筆話」を用いた。梁公は詳しい話を聞きたいと望んで、翌日再会することを約束した<sup>13</sup>。

他方、梁啓超はチャウとの最初の面談の経緯を記した一文を、まず『新民叢報』第六七号に「記越南亡人之言」として掲載し<sup>14</sup>、後に『越南亡国史』の最初に「越南亡国史前録」として再録した<sup>15</sup>。その冒頭で、梁は次のように述べている。——某年某月某日、主人「梁を指す」が部屋にどっかりと座して有賀長雄氏の『満州委任統治論』を読んでいると、忽然と□□□□<sup>16</sup>という中国式名刺を携えた者が訪ねてきた。来謁者は自己紹介の書状も携えており、その冒頭に次のように記していた。「吾儕亡人、南海遺族。日與豺狼鷹鷂為命。每磨眼望天、拔劍斫地、輒鬱鬱格格、不欲生噫吾且死矣。吾不知有生人之赴矣」(私ども亡命者は南海の遺民です。日々、山犬や狼、鷹、猪と命をかけて争い、いつも目をこらして天を仰ぎ、剣を抜いて大地に斬りつけ、そのたびごとに鬱屈として、生きる意欲を失い死にたいと思ってきました。私どもが生きているのかさえわからないといったありさまです)。続けて、「吾必一見此人而後死矣、吾不知有生人之趣矣」(私どもはあなたに是非とも一度お会いしたい。お会いしてから死ぬのであれば悔やむことはありません)。さらに、「落地一声哭即已相知、読書十年眼遂成通家」[「前掲のチャウの回想録における引用と同じだが、敢えて繰り返せば意味は次のとおり…この世に生まれて一声泣けば、すでに知り合いです。まして私は一〇年間先生の書物を読み続け、今では先生と心が通じ合っていると確信しています」。そして、「援此義以自信其無因至前之不為唐突也」(以上のようなしなで、格別の因縁もなくお訪ねしたことを、唐突なこととはお考えにならないであろうと信じております)と続ける。

——以上のような名刺と書状を見た梁は、気を引き締めて客の待つ部屋

に入った。客は従者を一人伴っており<sup>17</sup>、その従者は両粵（広東と広西）に二十年ほど滞在していたので、粵語（広東語）をわずかながら話した。客は容貌こそ憔悴しているものの、その中に俊偉の態を含み（機敏で堂々としており）、一見して異人（すぐれた人物）であることがわかった。

——お互いに「筆談」すること数時間に及んだが、周囲が雑然としており、十分に言葉を尽くすことができなかった。なぜならば、珍しい客が来訪していると聞きつけて、梁の門弟たち十数人が、周囲に座り込んだからである。そこで、後日再会することを約して、客は帰っていった。その二日後に、横浜の山の手にある、太平洋「実際には東京湾」を臨む小さな酒楼で、両者は再度会談した<sup>18</sup>。

ただし、チャウの回想録「獄中記」によれば、この時の会談のみでは十分意を尽くすことができなかったたので、「越南亡国史」の草稿を記して梁に渡した。梁はそれを印刷出版に付した<sup>19</sup>。

また、チャウの今ひとつの回想録「自判」は、次のように述懐する。——「梁の紹介によってチャウが東京で犬養毅や大隈重信などと面談した後、その某日」梁が私を招いたので訪問すると、今後の方針として、第一に、ベトナムの惨状とフランスの陰謀を痛切に記した文章を執筆して世界の世論に訴えること、第二に、書物の印刷が終わったらチャウ自身がそれを携えてベトナムに一時帰国し、ベトナム青年たちに日本遊学を鼓舞することを助言した。チャウはその言葉に従って「越南亡国史」を書き上げて梁に示し、出版することを請うた。梁はそれに同意した<sup>20</sup>。

国立公文書館の所蔵する『越南亡国史』の奥付は、朱色の活字体で、以下のように記している。

「光緒三十一年九月十一日印刷

同 十五日発行

『北の丸』第51号 国立公文書館所蔵『越南亡国史』をめくって

定価「金額の上に日比谷図書館の蔵書朱印が捺されており読み取れな

い」

編者 新民叢報社員

上海棋盤街中市

総發行所 広智書局

上海棋盤街中市

印刷所 広智書局活版部

寄售処 内地各書坊

横浜新民社

東京中国書林

以上によれば、同書は上海の広智書局で印刷発行され、中国各地の書店、そして横浜の新民叢報社や東京の中国書林で委託販売された<sup>21</sup>。

## 二 『越南亡国史』の体裁

国立公文書館の所蔵する『越南亡国史』は、縦二二cm、横一五cmの小冊子である<sup>22</sup>。

その構成は、以下のようになっている<sup>23</sup>。  
最初の表紙は黒の筆記体で次のように記す。

「越南亡命客巢南子述

越南亡国史

附 越南小志 新民社員編

通俗時局鑑第三種

次の中表紙は、朱色の筆記体で、次のように記す。

「越南亡国史」

附 越南小志 新民社員編

その裏には、朱色の活字体で、次のように記しており、これが初版本であることを示している。

「広智書局第一次印行本」

次の頁には、上欄に横書きで、次のようなタイトルが付されている（朱色の活字体）。

「通俗時局鑑発印縁起」<sup>24</sup>

その下に縦書きの朱色の活字体で、「通俗時局鑑」シリーズを刊行する趣旨が記されている。「時局の危急を知っていると皆が言うが、しかしその真実を知る者はわずかである」、「その真相を知るのは、国民の義務である」云々。文責は「上海広智書局編輯部識」である。

その裏の頁（ここから頁数が入り四と記す）には、やはり朱色の活字体で、同シリーズの刊行一覧が載る。

「第一種 中国国債史	飲冰室主人著	定価 貳角
「第二種 日俄戦後満洲処分案	新民叢報社員編	定価 三角五分
「第三種 越南亡国史	越南亡命客巢南子述	定価 二角半
「第四種 中国铁路史	飲冰室主人著	近刊
「第五種 勢力範圍解	披髮生著	近刊
「第六種 朝鮮及西蔵	飲冰室主人著	近刊
「第七種 以下題未定」		

以上よりして、『越南亡国史』がシリーズ三番目の書物として刊行されたことが判明する。なお、シリーズ中に見える作者名「飲冰室主人」は、梁啓超の号である。

次の五頁目に、やはり朱色の活字体で、「叙」が記されている。「最近一

人の越南亡命客と接触をもち、その語るところを聞き、自分は涙がとまらなくなつた」云々。文末に「乙巳九月 飲冰識」とあり、一九〇五年陰曆九月に梁啓超が記したことが知れる。なお、平凡社刊の邦訳では、ここまでの部分は収録されていない。

次に頁を繰ると、黒の活字体で「越南亡国史前録（記越南亡人之言）」が印刷されている。頁一から一一までである。平凡社刊の「越南亡国史」はこの部分からの邦訳を、「はじめに」との小見出しを付して収録している。本稿四〇五頁に示した「某年某月某日」で始まる文章以下の部分が、その前半部分である（なお、それに続く、小酒楼での面談の内容などについては、本稿七〇八頁に後述する）<sup>25</sup>。

「前録」が終わると、次の頁から黒の活字体で、「越南亡国史」の本文が始まる。頁は改めて一から振り直されている。

本文一頁の冒頭にあるタイトルは、次のとおりである。

「通俗時局鑑第三種 越南亡国史」

広智編集部 纂

越南亡命客巢南子述

本文の一頁目は、作者の思いを述べた前書きにあたる部分である。なお、この部分は、平凡社刊の邦訳本には収録されていない。——「無国の」が国事を述べるのは、痛恨なことであるが、私はこの文を草する。飲冰室主人は、「ああ、我々とあなたは同病である。且つまた、フランス人は越南においてさまざま嫌がらせをしているが、世界の人はそれを知らない。あなたが述べることを、私が世間に広めたい」、云々と語った。次いで、本文一頁の最終行から「一 越南亡国原因及事実」の章が始まる。その最初の部分の概要は、本稿八頁に紹介する。

以下、九頁の冒頭から「二 国亡時志士小伝」の章、一八頁の中途から

「三 法人困弱愚警越南之情状」の章、そして四一頁の冒頭から「四 越南之将来」の章が五〇頁まで続く。その概要は、本稿八〜九頁に紹介する。なお、この本文の一章から四章までは、平凡社刊に全文訳出されているので、詳しくはそちらを参照されたい。

次に、附録として「越南小志 新民叢報社社員編」が、五一頁目から七二頁まで収録されている。それは五章に分けられている。各章のタイトル及び掲載頁を、以下に示す。

- 一 地志(五一〜五三)
- 二 建国沿革及與我國交渉(五三〜五七)
- 三 與法國之交渉(五七〜六三)
- 四 法國之越南(六三〜六六)
- 五 法國越南攻略與中國之關係(六六〜七二)

以上「越南小志」各章の概要は、本稿九〜十頁に紹介する。なお、この「越南小志」は平凡社刊の邦訳には収録されていない。

見開きの次の頁に同書の奥付が印刷されている。これについては、すでに本稿第一章の末尾(五頁)に引用したので、ここでは繰り返さない。

さらに、奥付の裏の頁には、上半分に同一シリーズの既刊書『中国国債史』の案内文、下半分に『日俄戦後滿洲処分案』の案内文が、朱色の活字体で記されている。

最後の裏表紙には、何も記されていない。

### 三 『越南亡国史』の内容

次に、『越南亡国史』の内容について概観する。なお、前述のとおり、

同書の「前録」、ならびに(「叙」を除く)本文については、平凡社刊に全文が収録されている。

「越南亡国史前録」は、前述のとおり、横浜でのファン・ボイ・チャウとの会談内容を、梁啓超が「記越南亡人之言」と題して『新民叢報』第六七号に掲載した記事を再録したもので、梁とチャウの間に交わされた問答を、梁が纏めた形を取っている。

その冒頭の面談に至る経緯については、すでに本稿四〜五頁に紹介したので、以下には、横浜の小酒楼で再会した時の両者の問答の部分から、紹介することとしたい。——まず、渡日に至る経緯を梁が聞くと、チャウは旅券を請求しても許可を得られないので、妻子に累が及ばないように、片田舎の農民に預けてから、中国商人の雇い人に変装して脱出したと答えた。チャウは次いで、懐中からフエの皇子・畿外侯<sup>26</sup>が当局に提出した旅券申請書を取り出して梁に示した。その申請書が当局によって却下されたことを知ると、梁はベトナムの「貴族の末路」を嘆息し、チャウもまた涙を流して、筆談の紙がびしょ濡れになってしまった。

続いて、チャウは梁の問いに答える形で、以下の事項について説明している。——現在のベトナムの朝廷は、フランス人の傀儡となっている。国内で抵抗の志を持つ者たちはかなりの数に上るが、各地に雌伏しているのみである。他方、フランス人に追従する裏切り者たちは、自分たちが搾取され利用されていることを知らない。ベトナムの面積は日本と同じ程度であり、人口も日本に比べて少ないわけではないので、国民をよく安んじて活用するような立派な人物がいれば、天下を制覇することも可能である<sup>27</sup>。ベトナムに駐屯するフランス兵は五千人足らず、他方、彼らに仕えるベトナム兵は四十万いるが、フランスの苛酷な弾圧の前に、皆忍従するのみである。国内で結社を組織して祖国回復を図ろうとする者も

少ない。ベトナムにおいてフランス人は、人頭税を初め各種の許可税、物産税を課し、塩の専売制度を導入するなど、その搾取は苛酷をきわめている。フランス人はベトナム人を苦しめ、また愚かなままに留まらせている。このままでは早晩、ベトナムの民族が絶滅してしまふであらう。

以上の問答に続けて、梁は今日の欧州列強が全世界で我が物顔に振舞っていることを指摘する。ただし、その中でもベトナムの惨状はきわだっている。ベトナムの現況と比較すれば、日本の統治下にある「台湾人は天国に在るようなものである」（ただし、日本の朝鮮に対する取り扱いは、第二のベトナムのごとき状況を呈しつつある）。

「前録」の末尾は、次のような梁の言葉で結ばれている。——今日より後、人類世界の進歩が新たに展開されていけば、現在の欧州人による「偽文明」が横行して人々を苦しめ続けることも許されなくなるかもしれない。私はベトナムの人々の心を知るにつけ、また彼らの能力を知るにつけ、そのことを信じたい。

次に、「越南亡国史」の本文については、本稿第二章に言及したように、前書きにあたる短い記述（それには小見出しが付されていない）に続けて、一から四の章に分かれている。

そのうち、「一 越南亡国原因及事実」の章では、ベトナム「より正確にはキン族」の歴史に簡単に触れる。——中華帝国の支配から自立し、また南の林邑、占城「現在の中部ベトナムに存在した独立王国チャンパ」を併合し、真臘の地「現在の南部ベトナム」や高蛮「カンボジア」、万象「ラオス」を鎮撫し、一時は国力が強大となった。しかし、その後「暗に阮朝時代を指す」人々は怠惰となって国力も衰退し、フランス人につけこまれて、その侵略を許した。フランスに対して立ち上がった義兵たちの抵抗も敗退した。

「二 国亡時志士小伝」の章では、フランスの侵略に立ち上がった志士たち「義兵の指導者たち」一七名の小史を綴る。各人の武装決起と敗退の経緯について簡単に記している。ただし、最後に取り上げる潘廷逢<sup>28</sup>については、かなりの頁を割いている。そして、次のように述べて章を終える。

——一八九五年に潘廷逢「ファン・ディン・フン」が病死すると、義覚の抵抗も壊滅し、ベトナム全土がフランス人によって平定された。それよりこのかた、フランス人は悪辣な手段を弄してベトナムを経営し始めたのである。

「三 法人困弱警越南之情状」の章では、フランスによるベトナム支配の実情が具体例をもって語られる。——国王は存続こそ許されてはいるが、まったく実権を失って、フランス人の言うがままになっている。すなわち、フランスは「保護」の二字をもって世界の列強を欺いている「フランスはベトナム朝廷を保護するとの建前を取るが、それは世間を欺くための方便にすぎない」。

——抵抗する者たちを容赦なく弾圧し、他方では追従する者たちを取り立てている。民には種々の税金を課している。

ここでチャウが具体的に例示する税金は、田畑之税、人口税「人頭税」、屋居之税「家屋税」、渡頭之税「河の渡し場で課せられる」、生死之税「生死を届け出るときに支払う」、契券之税「不動産売買の契約書に証明印を受けるために支払う」、船戸之税「持ち船に課される」、人事之雑税「冠婚葬祭の許可を得るために支払う」、商売之税「商品に課される」、市塵之税「市場ならびに出店者に課される」、塩酒之税、殿寺之税「寺社に課される」、工芸之税「手工業者に課せられる」、地産之税「各地の特産物に課される」、種煙田之税「煙草栽培地に課される」、生煙之税「収穫、加工された煙草に課される」、熟煙之税「煙草を買い取った商人に課される」、公局

煙税「煙草の卸業者に課せられる」、私局煙税「煙草の小売業者に課せられる」の一九種に上る。

さらに、つぎのように慨嘆する。——フランス人は協力する有力者たちに「英豪会」を組織させ、また「密魔邪」(フランスの巡警隊の隠名)を駆使して、人々を搾取し弾圧している。また、フランス人は各都市に妓楼を設けて娼妓税を課し、哀れな女性たちを苦しめている。さらに、ベトナム人を愚民化するために、官吏登用試験を形骸化し、人々が外国人と折衝し各国の言語を学ぶのを禁止し、そして御用新聞を通じてフランスの保護政策を援護する記事を書かせたりしている。

「四 越南之将来」の章は、梁啓超がファン・ボイ・チャウとの問答を纏める形式を取っている。すなわち、ここまでベトナムの苦境について聞いてきた梁は憤然として、「果たしてベトナムはもう滅んでしまうのだろうか」と問いかける。これに対してチャウは次のように応じた。——もしも人々の心構えさえしっかりしていれば、亡びるか否かはまだ測り知ることができない。もしもベトナム人の心がしっかりしていれば、どうして滅ぶことがあるのか、云々。

以上の本文に続いて、「附録」として「越南小志」が付されている。ただし、これはファン・ボイ・チャウの言葉を纏めたものではなく、「新民叢報社社員」が編集したものである。中国人読者を想定し、いわば予備知識として、ベトナムの地理、歴史、現状を紹介したものである。その概要は、以下のとおりである。

「一 地志」は、冒頭でベトナムの地理的位置(アジアの中央にあって、北は中国の広東、広西、雲南の三省、西はラオスと隣接し、東は東京湾に面する)、地勢(西北に山嶺多く、沿海に平野が多い)、国土は南北に細長く、東西の距離は短い)、面積(二十四万五千方里余り)、人口(約二千万)を

示し、土地は肥沃で物産が豊かであると記す。

次に、フランス支配下で「東京」(Tonkin)と呼ばれるようになった「北圻」一六省、「安南」(Annam)と呼ばれるようになった中部ベトナム九省、交趾(Cochin-China)と呼ばれるようになった南部ベトナム六省の名称を列挙する。そして、地方制度について、古くから中国の制度とさほど異るところはないと述べる。最後に、再び地形について、紅河とメコン河が形成する南北の二大デルタに言及し、また国際河川としてのメコン河について簡単に説明する。

「二 建国沿革及與我国交渉」は、当初は朝貢制度を通じて、その後は中華帝国の版図として、中国諸王朝がベトナムに郡県を置いたこと「年代によって名称や区分が異なる」、次いで五代十国時代から安南の自立が始まり、独立王朝として丁朝、前黎朝、李朝、陳朝、後黎朝、莫朝、阮朝「一八世紀末タイソン蜂起で全国を平定したグエン氏の王朝」、舊阮朝「フエを王都としてザロンが一八〇二年に開設したグエン朝」について、中国との朝貢・冊封関係や交戦を織り交ぜつつ概説する。

「三 與法国之交渉」は、一八世紀のフランス人宣教師やフランス使節の接触などから筆を起し、一九世紀半ばからのフランスによるベトナム攻略の経緯を、主要事件の発生年を提示しつつ概説する。そして、フランスが阮朝廷とフエで調印した一八八四年の保護条約に対して中国が反発して清仏戦争が勃発、天津条約によって中国が数千年来有していた権利を一切放棄し、かくして安南は正式にフランスと「再醮」(再婚)するに至ったと結ぶ。

「四 法国之越南」では、フランス人が印度支那総督の下に、交趾(Cochin-China [「ヤム」])と東京(Tonkin)を「領地」、安南(Annam [「マム」])、柬埔寨(Cambodia [「ヤム」])、老撾(Naos [「ヤマ」])を「保護地」、

「カンボジアの」比素 (Bassac) 省、米克利 (MeLudrey) 省「不詳」、大湖 (Biar Ho) <sup>29</sup> 西沿岸地方を「勢力地」として編入したと述べ <sup>30</sup>、それぞれの面積、人口、人種、宗教、兵員数を示す。そのうち、フランスが最も勢力を張るのは、交趾、次いで東京である <sup>トシケン</sup> と指摘する。そして最後に、内政の「惨状」は、巢南子が詳述しているので、ここでは繰り返さない <sup>トシケン</sup> と述べる。

「五 法国越南攻略與中国之關係」は、冒頭で、フランスの前首相が議會で「我が国は支那に至るルートを欲したがゆえに、東京を占領せざるを得なかった」と言明したとする。事実、サイゴンに代わって「中国に地理的に近い」ハノイをインドシナ統治の中心地とし、ハノイから紅河沿いに雲南へと至る鉄道を敷設し、また海路欽州の北海港や海南島の海口、フランスの新租借地広州湾、香港などへと至るためにハイフォン港を開いた、云々と指摘する。

そして、一八九七年と一八九八年にインドシナ総督府が決定した二種類の鉄道敷設計画を示し、中国へと進入するためのフランス人の企みに警戒感を表明する。

#### 四 漢字文化の共有

以上に見てきたように、『越南亡国史』はファン・ボイ・チャウ単独の著述ではなく、チャウと梁啓超との合作である <sup>31</sup>。

無論、チャウはそれ以前から、『越南亡国史』のような書物を執筆する構想を、独自に持っていたであろう。しかし、それが具体的な書物として成立したのは、本稿に述べてきたように、やはり横浜での梁との面談とそ

れに続く親密な交流が機縁となったと見なすべきである。

「越南亡国史前録」(もともと「記越南亡人之言」の題名で『新民叢報』に掲載された) は言うまでもなく、「越南亡国史」本文の第四章も、梁が質問しチャウがそれに答えるという問答形式で記されている。文章を纏めたのは、梁啓超その人である。

他方、本文の第一章第三章は、チャウが草稿をしたためた部分である。ただし、この部分についても、チャウの回想録によれば、梁の勧めに従ってチャウが草稿をしたためて梁に示し、梁がそれを印刷に付したという(本稿五頁参照)。おそらく、その過程で、梁はチャウの草稿を校閲し、種々の加筆修正を施したと考えるべきである。

ここでひとつの疑問が生じる。梁啓超とファン・ボイ・チャウが、これほどまでに親しい交流を持つようになったのはどうしてなのか? 筆者は、かつて両者を媒介する重要な要素として、両者が漢字文化を共有していた事実を指摘した <sup>32</sup>。

事実、チャウは梁との面談に際して、筆談、筆話で意志を通じた(本稿四〜五頁参照)。ただし、ここで留意すべきなのは、彼らが意思伝達の手段としての表意文字(漢字)を共有していたというだけではなく、漢文典籍についての素養を共有し、さらには筆談に際して墨書された筆跡の巧みさに関する審美観をも共有していたという事実である <sup>33</sup>。

本稿にも紹介したとおり、チャウはベトナムで、梁は中国で、それぞれ郷試(科挙の第一段階の試験)に合格しており、漢字世界における当代一流の知識人、教養人であった。両国の科挙制度に共通しているのは、四書五経などの漢文典籍に関する素養である。それら典籍はさまざまな故事や警句、慣用句を満載しており、漢字世界の文人たちは、自らの文章をしたためる際に、それらを盛んに引用した。

例えば、チャウが初対面の時に梁に示した書状には、「劍を抜いて大地に斬りつけ」る（原文では「抜劍斫地」）との表現が見えるが（本稿四頁参照）、その原典は杜甫の短歌行贈王郎司直に求められる<sup>34</sup>。これを目にした梁は、未見の異国の来訪者の素養浅からぬことを、ただちに見抜いたことであろう。

さらに、「越南亡国史前録」を読むと、チャウが発言した箇所、「子房報韓之志」という表現<sup>35</sup>や「勝広有如雲電絶無」という表現<sup>36</sup>が何気なく用いられている。前者は秦末、前漢の政治家である子房（本名は張良）、後者は秦末の反乱指導者である陳勝、呉広の故事を踏まえたものである<sup>37</sup>。

さらに、チャウが草稿をしたためた「越南亡国史」本文の第一章を見れば、漢文典籍からの引用は、次のとおりである。孟子の言う「国必自伐、然後人伐之」（国はまず自らが滅ぼし、しかる後にそれに乗じて他人が攻撃する）という表現<sup>38</sup>は、孟子離婁章句からの引用である<sup>39</sup>。また、「迨天之未陰雨、徹彼桑土、綯繆牖戸」（小鳥は空が曇つて陰気な雨が降り出す前に、桑の根をはいできて、巢の入り口を修繕する）という難解な表現<sup>40</sup>は、詩經邶風鴟鴞からの引用である<sup>41</sup>。「負且乘到寇」（凡人が不相応な輿に乗れば、強盗に襲われる）という表現<sup>42</sup>は、易經繫辭上からの引用である<sup>43</sup>。「枯楊生花何可久也、老婦得其士夫亦可醜也」（枯れた柳に花が咲いたとしても、どうして長続きするであろうか。老婦が若い夫を得たとしても、ただみつともないだけである）という表現<sup>44</sup>は、易經大過からの引用である<sup>45</sup>。

以上の表現が、チャウがしたためた草稿にすでにあったものか、あるいは梁が校閲する過程で新たに付け加えたものかは不明である。しかし、このような表現、そしてそれらに込められた意義や背景は、梁とチャウ、そしてこの書を読んだ当時の中国やベトナムの知識人たちによって、多かれ少なかれ共有されていた（少なくとも共有することが予期されていた）と

考えるべきである。

そして無論、中国、ベトナムのみならず日本（さらには朝鮮）の文人も、漢字、そして漢文典籍の素養を共有していた。やや余談となるが、梁の初対面からほど経ずして、チャウが梁の先導で横浜から東京に赴き、日本の政治家・教育者である犬養毅や大隈重信、柏原文太郎と面談した際の情景を以下に紹介する。このエピソードを、チャウ晩年の回想録「自判」は、いささか自慢げに記している。——大隈、犬養との会談に同席していた梁は、紙を取つて「此人大可敬」（この人は大いに敬服すべき人物である）と書いて大隈に示した。陪席していた犬養夫人が手に持つ扇をチャウに渡して、揮毫を依頼した。チャウは「四方風動、惟乃之休」（四方の風が動き、私はその中で一人休む）と記した。たまたま同席していた柏原文太郎が、チャウと大隈、犬養、梁が交わした「筆談之紙」を読んで、「予今日見君等、恍惚若讀小説中古時豪傑伝」（私は本日初めてあなた方に会ったが、小説に出てくる古い時代の豪傑の話を読んでいるようで、うっとりとした）云々と記してチャウに示した<sup>46</sup>。

扇への揮毫はチャウがその学識を示す機会であったとともに、墨書された文字の見事さを披露する機会でもあったろう。ちなみに、扇に記した言葉は、書經大禹謨からの引用である。また、柏原が感動したのは、チャウと日・中の政客が交わした議論の内容のみならず、それを漢文で述べる表現力、さらには書かれた文字の達筆さにもあったであろう。

さて、梁啓超とファン・ボイ・チャウの交流について、今ひとつの点を次に述べたい。

梁（一八七三年生まれ）とチャウ（一八六七年生まれ）を比較すると、実はチャウのほうが六歳も年長である。にもかかわらず、チャウは梁を師と仰いだ。例えば、梁が記した「越南亡国史前録」の中で、梁が自らを「余」

と呼び、チャウを「君」と呼ぶのに対して、チャウは自らを「弟子」と称している箇所がある<sup>47</sup>。

本稿第一章（四頁）にも言及したとおり、そもそもチャウが梁啓超の名前を知ったのは、まだ国内に留まっていた時期に、梁の刊行した冊子や雑誌を読んだことによる<sup>48</sup>。そのころ、梁はすでに中国、さらには漢字世界全体において広く名前を轟かせる当代一流の論客であった。国内に雌伏して自らの活動の将来について思い悩んでいた無名のチャウは、そのような梁の文章を読んで心酔し、また憧れを抱いたであろう。

日本に到着した後、ファン・ボイ・チャウは横浜に滞在中の梁に面会を求めた際に、自分が梁の著書の愛読者であると自己紹介した（本稿四頁参照）。以来、チャウは梁に師事することとなった。

チャウは『越南亡国史』に続いて、日本で多くの著作を執筆しているが、それらには梁からの影響が顕著に見られる<sup>49</sup>。その最たるものが、社会ダーウィニズムの影響であることを、筆者はすでに再三指摘してきた<sup>50</sup>。

一方、ファン・ボイ・チャウの多くの著述は、日本や中国で印刷されてベトナム国内に搬入され、多くの読者を得た。チャウの著述の中で、最初に印刷されたのは、本稿で取り上げてきた『越南亡国史』である<sup>51</sup>。チャウ晩年の回想録「自判」は、次のように述べている。——「梁に原稿を手渡してから」しばらくして、書「越南亡国史」が印刷された。私は梁公に帰国の挨拶をした。時に乙巳「一九〇五年」陰曆六月下旬のことであった<sup>52</sup>。私は曾公「タン・バット・ホー」を横浜に残したまま、「もう一人の同行者」鄧子経<sup>53</sup>を伴い、『越南亡国史』数十部を携えてベトナムに「一時」帰国した<sup>54</sup>。

チャウの活動形態が、国内に留まっていた時期と渡日以降の時期で決定的に異なる点のひとつは、印刷文書の有無に求められる。確かに彼は、渡

日以前の時期においても、宣伝、啓蒙活動における文書の役割を無視していたわけではない。例えば、彼が阮朝の王都フエに滞在していた一九〇三年もしくは一九〇四年に、『琉球血涙新書』と題する文書を執筆してフエの官人たちに示している<sup>55</sup>。しかし、それはあくまでも手書きの文書であって、流通範囲もきわめて限定されていた。

チャウがベトナムを脱出する以前の時代において、ベトナム国内で自分たちの文書を印刷に付すことは不可能であった。伝統的な木版印刷は朝廷によってほぼ独占されており、新たに導入された活版技術は限られた印刷業者によって占有されていた。反仏的な性格を持つチャウの文書を合法的に刊行することは不可能であった。地下出版をしようとしても、一部の主要都市に限定されていた印刷業者は、当局の厳重な監視下にあった<sup>56</sup>。

海外に脱出した後に、いわば安全地帯である日本（そして中国）において、チャウは自らの文書を印刷する機会に恵まれた。しかも、中国はもちろん日本の印刷業者も、漢文を扱うことに習熟しており、技術上の障害もなかった。

手書きの文書の場合は、一冊しかないオリジナルを回し読みしたり、せいで数冊の複写を手書きしたりするだけであった。これに対して印刷された文書の場合、数百、時には千の単位で、一字一句違わぬコピーを読者に届けることが可能となる。おまけに、本を手に入れた人間は、周囲の友人に回覧した。つまり、一冊のコピーをめぐる読者の輪が広がっていく。

インターネットはもちろんラジオや映画、テレビも普及していなかった時代にあつて、印刷された本や雑誌、新聞の執筆者がスターとなった。その意味で、梁啓超は中国、さらに広く漢字世界におけるスーパースターであり、ファン・ボイ・チャウはベトナムにおけるスーパースターであった。

チャウの著書を読んだベトナムの青年たちの中には、その呼びかけに応じて日本に留学する者も少なくなかった。また、それ以外の読者たちも、チャウの運動の熱心な支援者となった。チャウがその著書で用いた「愛国」「同胞」などの言葉は、漢文を読める知識人階層の範囲を越えて、(口伝を通じて)文字の読めない庶民にまで広く流布した。

### おわりに

以上、本稿において、日本国立公文書館所蔵の『越南亡国史』をめぐって、その刊行経緯、体裁や内容について概観し、また同書の持つ意義について若干の見解を述べた。

ファン・ボイ・チャウはベトナムにおいて、二〇世紀初頭の代表的な愛国者として高い評価を受けてきた。従来からベトナムの主要都市にはその名前を冠する街路が存在し、また最近では二〇一七年に生誕一〇〇周年を期して、生まれ故郷ゲアン省ナムダン県のファン・ボイ・チャウ記念地区が特別国家史跡に認定された<sup>57</sup>。

一方、日本においても、二〇一三年九月、日越外交関係樹立四〇周年に際して、TBSがベトナム国営テレビ(VTV)と共同制作した「The Partner 愛しき百年の友へ」で、日本滞在時期のファン・ボイ・チャウと浅羽佐喜太郎医師との交流を描き、注目された<sup>58</sup>。さらに二〇一七年二月に、ベトナムを訪問した天皇・皇后が、ハノイでの公式行事の後に立ち寄った古都フエで、ファン・ボイ・チャウ記念館を訪問した<sup>59</sup>。天皇・皇后は翌二〇一八年七月に、静岡県への私的旅行の一環として袋井市に立ち寄り、常林寺にあるファン・ボイ・チャウの浅羽佐喜太郎報恩碑を訪問

することを計画したが、折から西日本を襲った水害のために予定を(いったん)中止した<sup>60</sup>。延期となっていた訪問計画は、同年一月になって最終的に実現した<sup>61</sup>。これらの出来事が契機となって、日本でもファン・ボイ・チャウの事跡が、少しずつ知られるようになってきた。

さらに、このたび日越外交関係樹立四五周年を記念する共同事業として、日本とベトナムで同時にウェブサイトを公開された資料の中に、チャウが日本で最初に執筆した書物として『越南亡国史』が紹介されることとなった。日本においてもベトナムにおいても、ファン・ボイ・チャウ、そして彼の指導した東遊運動は、日越交流史におけるひとつの重要なシンボルとして評価されつつある。

しかし、ファン・ボイ・チャウは日越交流において重要な役割を果たした人物というだけではなく、当時の東アジア漢字文化圏における知識人として、梁啓超を初めとする中国の知識人活動家たちとも、浅からぬ交流を持ったのである<sup>62</sup>。意思伝達手段としての漢字という表意文字を共有したのみならず、さらには漢文で記述された古典書籍に関する素養や、墨書された際の筆跡に示される審美観をも共有する知識人が、国境を超えて東アジアには存在していた。その時代において、東京や横浜は、漢字文化を共有する知識人たちが交流し、お互いに心を通じ合う場であった。

本稿では図らずも、『越南亡国史』という書物を通じて、ファン・ボイ・チャウと梁啓超がどのように接触し、また親交を深めたのかを検討する機会となった。

\*本稿では、引用に際して原文をそのまま引き写した部分(ただし旧漢字は原則として当用漢字に改めた)については鍵括弧で囲み(○○○○)、適宜要約したり一部を省略したりして紹介した部分については、冒頭に縦線を付した(——○○○○)。また、両者において、筆者(白石)が注意書きや補足を加えた部分については、角括弧で囲った(〔○○○○〕)。

- 1 一九七三年九月二一日、日本とベトナム(当時のベトナム民主共和国、今日のベトナム社会主義共和国)の政府代表が、パリにおいて外交関係樹立に関する交換公文に署名した。
- 2 在ベトナム日本大使館「日越外交関係樹立四五周年(二〇一八年)関連事業(案)」、二〇一八年一月二三日付、<https://www.vn.emb-japan.go.jp/files/000418498.pdf> 参照。
- 3 日本国立公文書館: [http://www.archives.go.jp/event/jp\\_vn45/](http://www.archives.go.jp/event/jp_vn45/)。監修者は白石昌也。資料解説は日本語とベトナム語、そして英語の三か国語で記されている。ちなみに、注2に前述した表には、No.137行事名: 日越外交関係樹立四五周年記念プロジェクト「日本とベトナム: きざまれた交流の軌跡をたどる」.. 実施団体: 国立公文書館・ベトナム国家記録アーカイブズ局、実施日: 九月二〇日公開、開催地、活動場所: [http://www.archives.go.jp/event/jp\\_vn45/index.html](http://www.archives.go.jp/event/jp_vn45/index.html) と記されている。
- 4 国立公文書館所蔵『越南亡国史』(請求番号: ヨ二二三—〇〇一四)。
- 5 原文で旧漢字(繁体字)を用いている場合でも、引用に際しては基本的に、当用漢字に改めた。例えば、原文の表紙では『越南亡国史』と記しているが、引用に際しては『越南亡国史』と表記する。
- 6 以上、ファン・ボイ・チャウの前半生、そしてベトナムから日本への渡航の経緯については、以下の拙著を参照されたい。白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジア—ファン・ボイ・チャウの革命思想と対外認識』巖南堂書店、一九九三年、第一部、.. ならびに白石昌也『日本をめざしたベトナムの英雄と皇子—ファン・ボイ・チャウとクオン・デ』彩流社、二〇一二年、第一章、第二章。
- 7 狭間直樹『梁啓超—東アジア文明史の転換』岩波書店、二〇一六年、.. 陳立新『梁啓超とジャーナリズム』芙蓉書房出版、二〇〇九年。また、『アジア歴史事典』九卷、平凡社、一九八五年、二九八〜二九九頁をも参照。
- 8 白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジア』(前掲注6)、一三二〜一三五頁。『新民叢報』横浜、各号。
- 9 ファン・ボイ・チャウはその生前に二つの回想録を記している。第一は、広州で囚われて獄中であつた一九一四年に記した回想録「獄中記」(注11参照)である。第二は、フエで幽閉生活を送っていた晩年の一九三〇年代末に記した「自判」、別名「潘佩珠年表」である(注13参照)。
- 10 潘佩珠(南十字星訳)「獄中記」長岡新次郎・川本邦衛編『ヴェトナム亡国史他』平凡社、一九六六年、一二四頁。
- 11 前述のとおり、ファン・ボイ・チャウは二人の同志とともに来日した。ここに言う「曾公」とは、そのうちの一人タン・バット・ホー(Tang Bât Hô、曾拔虎、一八五八〜一九〇六年)を指す。
- 12 千島英一・櫻井良樹編『潘佩珠伝』芙蓉書房出版、一九九九年は、前半に内海三八郎が記した「潘佩珠伝記」(日本語)、後半にファン・ボイ・チャウ晩年の回想録「自判」(漢文)を所収する。本文に概要を記した箇所は、その「自判」二五四〜二五五頁による。
- 13 梁啓超「飲冰室自由書」○記越南亡人之言『新民叢報』第参年第十玖号(原第六七号)光緒三十一年陰曆三月一五日、明治三十八年(陽曆)四月一九日付。刊行年は一九〇五年である。同雑誌の原本は早稲田大学図書館所蔵。また、最新の影印版としては、中国近代期刊叢刊・第二輯『新民叢報』十、中華書局出版、北京、二〇〇八年、九二〇七〜九二一六頁に所収。
- 14 『新民叢報』に掲載した元の記事がそのまま、「亡国史前録」として再録されている。
- 15 原文伏字のまま。客人に迷惑が及ぶのを恐れて、名刺にある本名を明記するのを避けたのであろう。
- 16 ここに言う「従者」とは、注12に言及したタン・バット・ホー(曾拔虎)を指す。以上は、国立公文書館所蔵『越南亡国史』(前掲注4)所収の「越南亡国史前録」一頁に依拠する。なお、「越南亡国史前録」の邦訳は、潘佩珠(今西凱夫訳)『ヴェトナム亡国史』長岡新次郎・川本邦衛編『ヴェトナム亡国史他』平凡社、一九六六年、三頁以下に、「はじめに」の見出しで収録されている。本稿での引用に際しては、その邦訳を参照しつつも、筆者(白石)自身で改めて訳出を試みた。
- 17 潘佩珠「獄中記」(前掲注11)、一二四頁。

20 千島英一・櫻井良樹編『潘佩珠伝』(前掲注13)、二五六頁。

21 筆者は旧著『ベトナム民族運動と日本・アジア』(前掲注6)、三二八頁で、ファン・ボイ・チャウが『越南亡国史』を皮切りに、極めて多くの文章を日本で執筆し、印刷に付している」と記したが、少なくとも『越南亡国史』については、日本で執筆されたものの、印刷されたのは上海であった。ここで訂正したい。国立公文書館所蔵の同書には、複数の蔵書印が捺されている。①中表紙…「越南亡国史」(朱色の筆記体)という題字の上部に重なる形で「東京都立図書館蔵書」の大判の朱印、さらに題字の「史」の右横に「中山氏蔵書之印」の小ぶりの朱印が捺されている。②それをめくった次の頁(つまり中表紙の裏頁)：「広智書局第一次印行本」(朱色の活字体)の右横に「内閣文庫」の朱印、さらに右側上方に蔵書整理番号として「内閣文庫」(一冊、二〇三一九号、漢書)の黒インク印が捺されている。さらに、「広智書局第一次印行本」の上方には、二種類の受け入れ印が重ねて捺されている。最初に捺されたほう(赤インク)には「東京都立中央図書館」の名称が読み取れるが、年月日などの記載は不鮮明である。その上に重ねて黒インクで押されたほうは鮮明で、「東京都立日比谷図書館」(昭28.10.5.119279)と読める。③「越南亡国史」の本文が始まる頁…冒頭の題字の下方に「片岡文庫」という小ぶりの朱印が捺されている。④頁七二(「越南小志」の最終頁)…末尾上欄に「内閣文庫」の朱印。

22 「広智書局第一次印行本」(朱色の活字体)の右横に「内閣文庫」の朱印、さらに右側上方に蔵書整理番号として「内閣文庫」(一冊、二〇三一九号、漢書)の黒インク印が捺されている。さらに、「広智書局第一次印行本」の上方には、二種類の受け入れ印が重ねて捺されている。最初に捺されたほう(赤インク)には「東京都立中央図書館」の名称が読み取れるが、年月日などの記載は不鮮明である。その上に重ねて黒インクで押されたほうは鮮明で、「東京都立日比谷図書館」(昭28.10.5.119279)と読める。③「越南亡国史」の本文が始まる頁…冒頭の題字の下方に「片岡文庫」という小ぶりの朱印が捺されている。④頁七二(「越南小志」の最終頁)…末尾上欄に「内閣文庫」の朱印。

23 ⑤奥付(すでに本稿一の末尾に言及したとおり)…定価の箇所「日比谷図書館」の小ぶりの朱印が捺されている。

24 同書の中表紙と本文冒頭の一頁、そして奥付が、前述の日越外交関係樹立四五周年記念事業としてオンライン展示されている(注3参照)。

25 原文では右から左に横書きされている。

26 「越南亡国史前録」の邦訳は、前述の長岡新次郎・川本邦衛編『ヴェトナム亡国史他』(前掲注18)「まえがき」三二二頁。

27 クオン・デ(Cuong De、疆樞、一八八二〜一九五一年)を指す。フェエの皇族、畿外侯(Ky Ngai Hau)はその称号。一九〇三年頃、ファン・ボイ・チャウたちが国内で非合法革命団体を組織した際に(後に「越南維新会」と命名する)、その盟主に推戴された。クオン・デについては、拙著『日本をめざしたベトナムの英雄と皇子』(前掲注6)を参照されたい。

27 ベトナムは面積、人口ともに日本に引けを取らないわけだから、日本人に可能なだった偉業(明治維新の成功や日露戦争での勝利など)に匹敵する事業を、

『北の丸』第51号 国立公文書館所蔵『越南亡国史』をめくって

ベトナム人できないわけがないということを示唆する。ファン・ボイ・チャウは同趣旨の主張をより明確な形で、『勸国民資助遊学文』(一九〇五年執筆)の中で展開している。——明治維新以前の日本は、国土、人口ともにさほど強大ではなかった。そして、日本人といえどもベトナム人と「耳目」や「肝腸」に差異があるわけではない、云々。(白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジア』(前掲注6)、三七四〜三七八頁を参照)。なお、当時の中国人の間には、中国は面積、人口ともに日本の十倍の規模を持つことから、日本人にできたことを中国人が実行できないわけがないという認識が明白に存在した(白石、同上書、三八二頁を参照)。

28 潘廷逢(ファン・デイン・フン、Phan Dinh Phung、一八四七〜一八九五年)。ファン・ボイ・チャウと同郷、阮朝の元高官。

29 文意からしてトンレサップ湖を指すと思われる。原文で示されたアルファベット Bidafo はベトナム語に起源すると思われるが不詳。

30 さらに「附言」として、「中国広州砲州島が「租借地として」割譲されて以来、印度支那総督の所轄に帰すこととなった」と述べている。

31 「越南亡国史」の成立の経緯に関するファン・ボイ・チャウ自身の回想については、本稿五頁に言及した。なお、平凡社刊の『ヴェトナム亡国史他』(前掲注18)の編者は、「凡例」(邦訳二頁)の中で、次のように述べている。『ヴェトナム亡国史』は、本文中にも見られるように、梁啓超が潘佩珠の草稿と談話をもとに加筆整理したもので、厳密には梁・潘の共著とみなすべきであるが、潘自身は『獄中記』その他の中でこれを自著としているので、いまは一応潘の著作として扱うことにした。

32 白石昌也「ベトナム民族運動家ファン・ボイ・チャウとアジア」石井米雄編『アジアのアイデンティティ』(シリーズ国際交流四)山川出版社、二〇〇〇年、一五三〜一六一頁、白石昌也『日本をめざしたベトナムの英雄と皇子』(前掲注6)、五五〜五六頁。

33 さらに後日、梁の紹介を通じて、犬養毅、大隈重信など日本の政治家、教育者たちと会った際にも、筆談を用いた(本稿十一頁に後述)。

34 邦訳『ヴェトナム亡国史他』平凡社、一九頁の訳者注三を参照。

35 原文「越南亡国史前録」(国立公文書館所蔵)、三頁。

36 前掲注35、四頁。

37 それぞれ邦訳『ヴェトナム亡国史他』一九頁の訳者注六、注七を参照。

- 38 原文「越南亡国史」本文(国立公文書館所蔵)、三頁。
- 39 邦訳『ヴェトナム亡国史他』三〇頁の訳者注五を参照。
- 40 原文「越南亡国史」本文(国立公文書館所蔵)、四頁。
- 41 邦訳『ヴェトナム亡国史他』三〇頁の訳者注六を参照。
- 42 原文「越南亡国史」本文(国立公文書館所蔵)、四頁。
- 43 邦訳『ヴェトナム亡国史他』三〇頁の訳者注七を参照。
- 44 原文「越南亡国史」本文(国立公文書館所蔵)、六頁。
- 45 邦訳『ヴェトナム亡国史他』三〇頁の訳者注八を参照。
- 46 千島英一・櫻井良樹編『潘佩珠伝』(前掲注13)、二五六頁。
- 47 原文「越南亡国史前録」(国立公文書館所蔵)二二三頁。
- 48 その間の経緯について詳しくは、白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジア』(前掲注6)、一三二〜一三七頁。
- 49 例えば、ファン・ポイ・チャウが一九〇七年に執筆した『海外血書続編』と『新越南』に、梁啓超の『中国積弱溯源論』(一九〇〇年執筆)の影響が強く見られる。白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジア』(前掲注6)、二五九頁以下。
- 50 白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジア』第Ⅲ部(特に一章)、白石昌也「二〇世紀前半期ベトナムの民族運動」池端雪浦編『岩波講座東南アジア史』七卷(植民地抵抗運動とナショナリズムの展開)岩波書店、二〇〇二年、一八九〜二二二頁、白石昌也「ファン・ポイ・チャウーベトナムの社会ダーウィニスト」趙景達・原田敬一・村田雄二郎・安田常雄編『東アジアの知識人』第二卷(近代国家の形成―日清戦争―日韓併合―辛亥革命)有志舎、二〇一三年、八二〜九九頁。
- 51 ファン・ポイ・チャウ自身、最初の回想録「獄中記」の中で、同書が「私の海外における初めての著述」であったと述べている。
- 52 ファン・ポイ・チャウの回想録、特に晩年の回想録に記されている年月には、記憶間違いが多い。(二)でも、国立公文書館所蔵『越南亡国史』の奥付に記された刊行年月(本稿五頁参照)と整合的でない。
- 53 鄧子経(ダン・トゥー・キン、Đặng Tử Kinh、一八七五〜一九二八年)。ファン・ポイ・チャウが初めて渡日した時に同行した二人の同志のうちの一人である。
- 54 千島英一・櫻井良樹編『潘佩珠伝』(前掲注13)、二五六頁。
- 55 白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジア』(前掲注6)、一三七頁以下。
- 56 この前後の文章は、筆者の旧著『ベトナム民族運動と日本・アジア』(前掲注6)、三二七頁以下、ならびに『日本をめざしたベトナムの英雄と皇子』(前掲注6)、二九、七八〜八〇頁を下敷きにしてている。
- 57 以下のインターネット情報を参照。Hoàng Lam, “Khu di tích Lưu niệm Phan Bội Châu đơn Bàng xếp hạng Di tích Quốc gia đặc biệt”, Dân trí, 2017.12.16, <https://dantri.com.vn/van-hoa/khu-di-tich-luu-niem-phan-boi-chau-don-bang-xep-hang-di-tich-quoc-gia-dac-biet-2017121616157394.htm>; Thành Cường & Thanh Sơn, “Khám phá khu di tích quốc gia đặc biệt về chí sĩ Phan Bội Châu ở Nghệ An”, Báo Nghệ An, 2017.12.11, <https://baonghean.vn/kham-pha-khu-di-tich-quoc-gia-dac-biet-ve-chi-si-phan-boi-chau-o-nghe-an-164863.html>; K. Hoan, “Kỷ niệm 150 năm ngày sinh Phan Bội Châu”, Thanh Niên, 2017.12.17, <https://thanhnien.vn/van-hoa/ky-niem-150-nam-ngay-sinh-phan-boi-chau-910414.html>; Cục Di sản văn hóa (文化遺産局), “Di tích lịch sử Khu Lưu niệm Phan Bội Châu tại Nam Đàn”, <http://www.dsvh.gov.vn/pages/news/preview.aspx?n=1514&c=25>(以上二〇一八年一〇月四日参照)。
- 58 TBS 「The Partner 愛しき百年の友( : 友(愛) )」 [http://www.tbs.co.jp/partner\\_tbs/highlight/](http://www.tbs.co.jp/partner_tbs/highlight/); TBS, “Người công sự Partner: sự kiện nổi bật”, [http://www.tbs.co.jp/partner\\_tv/highlight/](http://www.tbs.co.jp/partner_tv/highlight/)(以上二〇一七年一〇月一〇日参照)。ちなみに、同作品はベトナムでも同時放映された。その直後の二〇一三年一〇月一四〜一六日、ハロン市で開催された第一八回ベトナム・フィルム・フェスティバルで、ドラマ部門入賞のうち五賞を受けた(大賞や日本側の出演者武井咲に対する主演女優賞を含む)。
- TBS, “(The Partner) Sweeps Vietnam’s Premier Film Festival-Special Drama Commemorating 40th Year of Japan-Vietnam Diplomatic Relations Wins Five Award”, 2013.10.18, [http://vovworld.vn/vi-VN/tap-chi-van-nghe/be-mac-lien-hoan-phim-viet-nam-lan-thu-18-188369.vov](http://www.tbscontents.com/en/news/%22The%20Partner%22%20Sweeps%20Vietnam%27%20Premier%20Film%20Festival-Special%20Drama%20Commemorating%2040th%20Year%20of%20Japan-Vietnam%20Diplomatic%20Relations%20Wins%20Five%20Award; VOV5, “Bé mặc liên hoan phim Việt Nam lần thứ 18”, 2013.10.17, <a href=)(以上二〇一七年一〇月一〇日参照)。

井上亮・今井孝芳「両陛下ベトナム訪問へ 秘めた歴史照らす旅」『日本経済新聞』二〇一七年二月二日朝刊・鈴木暁子・島康彦「二一〇年前ベトナムの青年二〇〇人が日本に渡った『東遊運動』の証し今も」『朝日新聞』二〇一七年二月二日夕刊・島康彦「埋もれた歴史光当てる旅」『朝日新聞』二〇一七年三月四日朝刊・鈴木暁子・島康彦「陛下『歴史を知るの』は大事」『朝日新聞』二〇一七年三月五日朝刊。また、以下のインターネット情報をも参照。島康彦・鈴木暁子「両陛下、ベトナム独立指導者の記念館訪問、日越交流の礎」『朝日新聞』二〇一七年三月四日、<http://www.asahi.com/article/ASK2Q6MF5K2QU7I107J.html>；山田奈緒「日越の絆」記念館訪問、チャウの資料熱心に見学」『毎日新聞』二〇一七年三月四日、[http://mainichi.jp/articles/20170305/k00/00m/040/052000c;Hoang Tao & Vo Thanh, "Nha vua va Hoang hau Nhat Ban tham nha Luu niem Phan Boi Chau", VN Express, 2017.3.4.](http://mainichi.jp/articles/20170305/k00/00m/040/052000c;Hoang Tao & Vo Thanh, ) <https://vnexpress.net/photo/the-gioi/nha-vua-va-hoang-hau-nhat-ban-tham-nha-luu-niem-phan-boi-chau-3550385.html>（以上、二〇一七年四月五日参照）。なお、ファン・ボイ・チャウは、前述のとおり、ゲアン省の出身だが、一九二〇年代後半から一九四〇年に没するまでフエでの幽閉生活を強いられた。そのフエの旧居には彼の墓などとともに記念館が建てられている。詳しくは、白石昌也「ファン・ボイ・チャウの史跡―ベトナム調査旅行から」『南方文化』（天理東南アジア研究会）二〇輯、一九九三年、一〇五〜一二三頁。

「天皇皇后両陛下が七月に静岡県を私的旅行へ」テレビ朝日、二〇一八年六月二十九日、[https://news.tv-asahi.co.jp/news\\_society/articles/000130682.html](https://news.tv-asahi.co.jp/news_society/articles/000130682.html)；「両陛下、私的旅行など中止―豪雨被害拡大を案じ」『読売新聞』二〇一八年七月七日、<https://www.yomiuri.co.jp/feature/70000304/20180707-0Y1T150050.html>；「両陛下、静岡訪問をお取りやめ―大雨被害に配慮」『産経新聞』二〇一八年七月七日、<https://www.sankei.com/life/news/180707/lif1807070017-n1.html>（以上二〇一八年一〇月七日参照）。なお、浅羽佐喜太郎（一八六七〜一九一〇年）は東遊運動を財政的に支援した医師だが、病気のため夭折した。東遊運動終焉後、中国に滞在していたファン・ボイ・チャウは、一九一八年に日本を二次訪問した際に、そのことを知ると浅羽医師の生まれ故郷である静岡県浅羽村（現在は袋井市の一部）を訪問し、彼を顕彰する石碑を常林寺境内に建立した。

「両陛下、静岡県訪問へ 一月二七日から私的旅行」『日本経済新聞』二〇一八年一月一三日、<https://www.nikkei.com/article/DGXMZ037694560T1C18A1CR8000/>（二〇一八年一月一九日参照）。夏目貴史・土屋祐二「天皇、皇后両陛下 袋井の常林寺など訪問」『中日新聞』二〇一八年一月二八日、<http://www.chunichi.co.jp/article/shizuoka/20181128/CK2018112802000026.html>；「両陛下、日越結ぶ功績に関心 浅羽佐喜太郎の展示視察」『静岡新聞』二〇一八年一月二八日、<http://www.ats.com/news/article/topics/shizuoka/571091.html>（以上、二〇一八年一月一日参照）。ならびに、長谷川智・多田晃子「日本・ベトナムの交流 両陛下、思いはせて―独立運動支援した浅羽医師の碑 訪問へ」『朝日新聞』二〇一八年一月二七日。

62 日本滞在時代のファン・ボイ・チャウは、梁啓超以外に、革命派の章炳麟、張継、そして雲南省留学生たちと交流を持ち、また孫文とも面談している。詳しくは、白石昌也「ベトナム民族運動と日本・アジア」（前掲注6）第一〇〜十一章などを参照。（早稲田大学名誉教授）